

## グイマツ雑種F<sub>1</sub>の植栽本数



グイマツ雑種F<sub>1</sub>植栽試験地

試験地にはha当たり 500, 1000, 2000, 4000, 8000, 32000本の植栽本数の異なる試験区を2回反復設定しています。

9年間の平均直径の推移をみると(図-1), 最初の3年間は密度に関係なく一定ですが, 5年目になると中間的な2000~4000本区が最大の平均直径を示すようになり, 7年目以降は1000本ないしは500本という低密度区が最大になります。このことから時間が経つにつれ, 高密度よりも低密度のほうが成長が良くなるのが分かります。しかし, 枝の枯れ上がりは高密度ほど高くなり, その傾向は時間とともに促進されます(図-2)。低密度でも, やがて枝は枯れ上がってくと予測されますが, 進行はかなり遅く, 節が残る可能性もあります。したがって, グイマツ雑種F<sub>1</sub>の最適な植栽本数はやや低密度の1000~1500本程度であると考えられます。



高密度区A(8000本/ha)と低密度区B(500本/ha)の比較  
低密度区のほうが樹径は大きい, 枝が枯れ上がらず太いことが分かります。

グイマツ雑種F<sub>1</sub>は野ネズミの被害を受けにくい, 従来のカラマツ造林のha当たり2500本の植栽よりも少なく植えてもよいと思われます。しかし, 疎植だと枝が枯れ上がらない心配があります。このような観点から, グイマツ雑種F<sub>1</sub>の最適な植栽本数を探るために行った植栽密度試験の9年間の結果を紹介します。

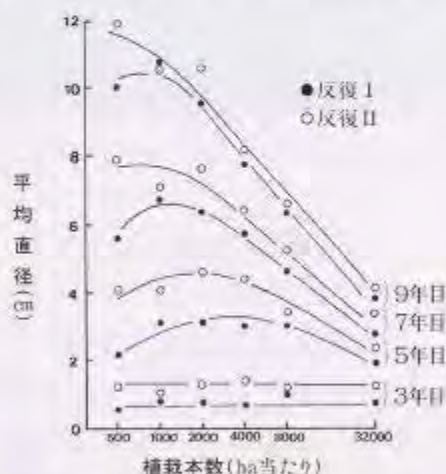


図-1 植栽密度と平均直径の関係

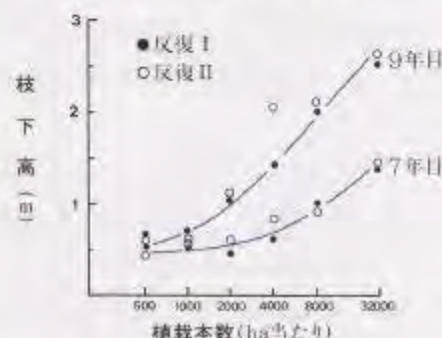


図-2 植栽本数と枝下高の関係